

一足早い春らん漫

～蘭（ラン）によるまちづくり～

赤平・らんフェスティバル（赤平市）

白い花びらが揺れる 緋の花弁が燃える
紫紺の花輪が薫る— 2010年4月中旬の
3日間、道央の赤平市で開かれた「らんフ
ェスタ赤平 2010」。会場となった市総合体
育館には全道から出品された大小500鉢も
のランがずらり勢揃い、その美しさと形の
ユニークさで訪れた人々の目を奪った。炭
鉱無きあとのまちづくりの一翼を担ったこ
の催し。十回目を迎え1万3千人という過
去最高の人出を記録し、市、市民、企業一
体の、花に託したイベントが、地域の活性
化に果たした役割がいかに大きかったかを
物語った。

■ ポスト炭鉱まち

このフェスティバルは“北海道の春は赤
平から”をキャッチフレーズに、桜前線が
まだ北海道に到着しない時期に、一足早い
春を、ランの花で楽しんでもらおうと
2001年にスタートした。赤平はかつて夕
張、芦別、歌志内などと並んで道内有数の
炭鉱まちだった。それが国のエネルギー政
策の転換と相次ぐ炭鉱事故で、ヤマは一つ

減り二つ減りし、1994年の住友赤平鉱を
最後についにゼロに。まちが成り立ってい
た重要な生産基盤が失われたとあって、他
の炭鉱市同様、「ポスト炭鉱」をどうする
かが市、市民の最大の課題となった。浮か
び上がった構想が工業と花卉栽培というハ
ードとソフトの両輪によるまちおこし。



ふくいくとした色と香りで入場者を出迎えるランの
迎え花

工業の方は工業団地を造成し、進出企業も張り付いて目標を何とか達成。しかし、一方の花卉栽培の方は、そのベースとなった鉢内熱利用のカーネーションとバラ栽培が、閉山とともに熱源が無くなり、燃料費の高騰もあって経営的に難しくなった。

種々検討の結果、花としての付加価値の高い「ラン」に特化することになり、同年、「赤平花卉園芸振興公社」を設立、ランの中でも最も人気の高いコチョウランに焦点をしばって栽培を拡大、この花では道内の生産を誇るまでになった。そのPRと、道民に桜の前にお花見を味わってもらおうと2001年から公社主催で始まったのが「らんフェスティバル」だった。

■ 紆余曲折の10年

それから10年。お花見の先取りといってもここに至る道のりは、決して平坦ではなかった。当初は無料で、もの珍しさやこの種の催しがどこでも行われていなかったことから千客万来だった。が、各地で似たような展覧会が開かれるようになったほか、出費が意外に多くかかり、かつ会場内外でお手伝いする人手不足もあって公社での経営は次第に難しくなり、存続が危うくなった。

この時救い手として名乗りを上げたのが、ランを中心に市内で花卉栽培を行っていた

ホームマックの子会社「赤平オーキッド」。ここまで育った催しをやめてしまうのはしのびないと、経営を公社から全面引き継ぎ。一方、市民の側も、公社まかせだった運営を反省し、市内有志企業で作る実行委員会を立ち上げて協賛金を募り、入場料や出店料も有料とする自主独立路線に切り替え再出発。

第8回の2008年のことだった。人口は最大の5万9千人から1万3千人に激減していた。これを知った一般市民も「市の大切な催しを一部の人たちだけにまかせておくのは申し訳ない」と、商工会議所、観光協会、市職員らを中心に続々と運営ボランティアを申し出た。この辺が元炭鉱マチの底力か。この意気込みは、作品を出展する全道のラン愛好者の人たちにも伝わり、例年より2~3割も多い出展参加が相次いだ。8回以来、経営も黒字が続いている。



春らん漫に咲き誇るランの前を人、人、人の波が続く

■ 人波 引きも切らず

こうして開かれた記念すべき第10回のフェスティバル。会場の体育館には、市特産の白い大輪のコチョウランから花の小振りなデンドロビューム、花穂がにぎやかなパフィオ、カトレア、さらにアンデス原産で、大きな葉の中心に黄色の花がちょこんとついたプレウロサリス・タイタンなど、愛好者ならずとも垂涎となる500鉢が部門ごとにずらり。

入り口にはおよそ100種のラン花で作られたオブジェ、「迎え花」がふくいくとした色と香りで入場者をお出迎え。その間をぬって人、人、人の波が続く。コーナーでは市内各園芸店のラン鉢即売や若い女性によるミニコンサート、押し花教室、さらに2階会場では講演会やフラワーアレンジメントなどが開かれて会場を盛り上げ、春はまだ浅いというのに会場内外は真夏並みの熱気。

家族連れで苫小牧から訪れたという主婦は「すばらしいの一語です。命の洗濯をさせていただきました」と、ほおを紅潮させる。地元の商店主も「私たちのマチでこんな見事なフェスタができるなんて信じられません。市民の誇りです。長く続けてほしいですね」と感激の面持ち。会場から出てきたどの顔にも満足の表情が浮かんでいた。

これらの運営を支えたのは500人にもものぼる市民のボランティア。預かった出展作品の集荷から枯らさないようにする維持管理、駐車場の整理から入場受付、会場内の誘導、案内まで全て無料で切り盛りし、「これがフェスタ成功の一要素」と主催者の感激もひとしお。

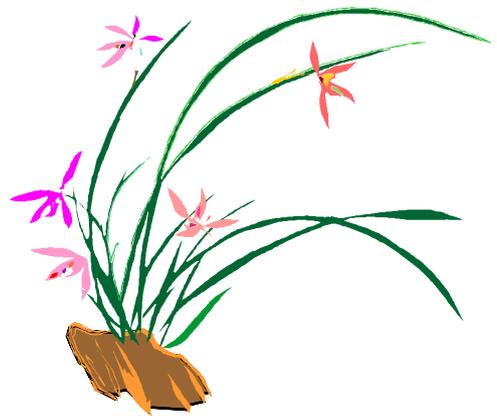
1回目の開催から関わっているNHK趣味の園芸で知られる江尻光一さん（千葉県）も講師として会場へ足を運び、「ポスト炭鉱を花で再出発しようという地域の心意気がひしひしと伝わってくる素敵な催し。また立派な作品が多く、北海道という土地がらがラン栽培に適しているのではないかと大いに未来性を感じました。将来、北海道独自の品種を生み出し、本州と交流して日本のラン栽培の夢と未来を共有したいですね」とべた褒めだ。



即売会もラン鉢を買い求める人たちが大にぎわい。暮らしにランが一步近づいた

■ 市の財産として永続させたい

こうした市全体の盛り上りに、事務局を担当した市商工労政観光課の高橋係長は、市民のマンパワーがあつての成功。高齢化は避けられないが、せっかくつちかわれた市民の連帯を大切に今後もフェスタは続けたいし、それ以外のまちづくりにもまい進したい」と決意を語る。実行委員長としてフェスタ全体を仕切った市商工会議所の西出勝利会頭（68）も「入場者は有料になってから最高。皆さんに満足していただき、まちも活気がみなぎってこんな嬉しいことはない。黒子に徹して支えてくれた市の職員や、仕事を投げ打ってボランティアを下さった多くの市民の協力のたまものと感謝している。この盛り上がったエネルギーを忘れずに、フェスタをさらに充実した形で続け、石炭なき後の赤平をみんなで作ってゆきたい」とまちづくりの情熱を語っている。



■ 連絡先

〒079-1192 赤平市泉町 4-1

赤平市役所商工労政観光係 笹木 学

TEL:0125-32-1841 / FAX:0125-32-5033

Email:kankou@city.akabira.hokkaido.jp